授業で輝く学校づくり

杉江 祐子

はじめに

2019 年 11 月 29 日に参加した教頭会議・研究協議会の場で教育次長が紹介したエピソードが筆者の胸を打った。「その定時制高校の先生は、こんな感想を寄せてくれました。不登校や様々な事情を抱えた生徒だからこそ、学校に期待している、と」。身の引き締まる思いであった。

筆者は、今年度から岐阜県立大垣北高等学校で教頭を務めている。2019 年 2 月 1 日に朝日大学で開催された第 4 回の高大連携・接続によるアクティブ・ラーニング研究会で報告したのは、前任校である岐阜県立本巣松陽高等学校における取組についてであった。さらに、7 月 6 日に同じく朝日大で開催された中部教育学会第 68 回大会の公開シンポジウムでも、同校での教育実践について報告するとともに、他の登壇者や参加者と議論する貴重な機会を得ることができた。

そこでは教務主任として、教員たちに対して「授業、何よりも授業」と訴えてきた。そして、生徒たちの「わかった」といった顔は、何よりも教員のモチベーションを上げ、学校を輝かせると信じてきた。「授業で輝く学校づくり」、これこそが私にとって教員生活での永遠のテーマである。

本稿では、上記の研究会およびシンポジウムにおける報告と議論の内容を振り返るとともに、それらを通じて見えてきたものについて述べたい。

1. 授業改善のポイント

第 4 回高大連携・接続によるアクティブ・ラーニング研究会では、本巣松陽高等学校において当時の学校長の指導のもと、教員の授業改善のポイントとして掲げてきた以下の諸点を紹介した。

（1）個人のレベル
①明確な学習目標を設定する。
②中心設問を工夫する。

（2）授業研究グループ（教科を超えた 3 人で構成のレベル
①AL 型授業を含めた授業デザインを研究する。
②効果的な「まとめ」や「振り返り」を研究する。

（3）学校全体のレベル
①さらなる言語活動の充実を推進する。
②「予習→授業→復習」のサイクル作りを徹底する。

また、河合塾が実施している「新しい学力」の測定・統合アセスメントである「学びみらい PASS」の結果から、本巣松陽高校の生徒の強みが「協働力」、課題が「情報収集力」であったことを受け、筆者は以下を自らの授業改善のポイントとしてきた。

（1）「わかる」（＝主体的な学び）レベル
①単元を貫くディープな発問を準備する。

②断片的な知識を構造化する機会を設ける。

（２）「つながる」（＝対話的な学び）レベル

①他の生徒に、自分の言葉で説明する機会を設ける。

②相手の説明に対して「いい質問」をすることを意識させる。

（３）「深まる」（＝深い学び）レベル

①自己の変容を自覚できる評価を作成し、実施する。

②自分と社会とのつながりを認知できる「振り返り」を実施する。

そして、上記の授業改善のポイントを踏まえた授業の事例として、文系選択の 3 年生を対象とする学校設定科目である「古典講座」において実施した『源氏物語』の授業を報告した。

（１）第 1 部「光源氏の若き日々」をいろいろな視点から分析する。（全員参加型ポスター・セッション）

（２）第 2 部「栄華をきわめた光源氏の後半生」～世界の人々へ、私たち本巣松陽生が『源氏物語』の魅力を語ります！（選抜型ポスター・セッション）

（３）第 3 部「54 帖のラストに込められた紫式部のメッセージとは何か」（パネル・ディスカッション）

いずれにおいても生徒たちはジグソー活動で資料を準備し、発表では話し方や質問の仕方を意識し、生徒用ルーブリック兼振り返りシートを用いて自己評価をした。

２. 授業づくりの問い直し

中部教育学会第 68 回大会公開シンポジウムにおいても上述した授業改善のポイントと授業事例について報告を行ったが、他の登壇者であった名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授の柴田好章氏および京都大学大学院教育学研究科准教授の石井英真氏との意見交換したことが、それまでの授業改善と自分自身の授業実践を新しい見地から問い直すきっかけとなった。

そこで、両氏との交流を通して得られた着想をまとめ、現任校の校内インフォメーションにおいて報告することにした。やや長くなるが、その内容を以下に掲載しておきたい。

報告「「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを問い直す」

●柴田好章氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

名古屋大学出身。小・中・高等学校での授業研究・授業分析を専門としている。社会科の初志をつらぬく会に所属し、問題解決学習の研究にも携わる。近年では、学校・教育委員会と連携し、校内授業研究、ミドルリーダー育成、カリキュラム・マネジメントなどの共同研究に取り組む。

公開シンポジウム「一人一人の子どもの豊かな学びを実現するための授業研究の役割」

（参考にしたい論点）

１　スタンダード、授業のマニュアル化の功罪

a.授業の質の底上げ

すべて（多く）の子どもの学びに効率性がある。

b.問題点

①絶対視されることにより、主体性・自律性を阻む。

②教師の専門性・教職の専門職性の低下（底上げ＋天井下げ）〈金太郎飴型授業〉

③形骸化する傾向

・「めあて」は示せばいいのか？

→子どもはこの「めあて」を学びたいのかを吟味してほしい。

・「発問」の本来の価値は？

→「発問」は時代を越えて大事。「発問」が指示になっていないか吟味してほしい。

２　一人一人に豊かな学びを！学ぶことには内在的な価値がある。でも簡単ではない。

a.豊かな学び：〈納得の学び〉が基本→「なるほど、生きててよかった」と思える学び

b.批判的思考：「本当にそうか？」「本当にそれがよいのか？」「本当にできそうか？」

３　一人一人の豊かな学びの実現：授業は子ども同士の学び合い、研修は教員同士の学び合い、さらに文化へ

a.教員同士の学び合いの機会として「授業研究」

研究とは未知への挑戦であり、正解はない。

b.一人一人を大切にするとは、集団の平均値を上げることではない（認識の背後にある個々の願い←洞察力）。

（懇親会の席で受けたアドバイス）

Q　授業は「型」ではないと思う。先生が言われるとおり、「発問」が大切だと考える。授業に「自信」を持つことができれば、クラス経営も保護者対応もすべてに「自信」が生まれる。若い先生方をどうやって伸ばせばよいか。

A　講義型の授業で、生徒たちを眠らせることのないベテランの先生の授業を参観してほしい。その先生は、生徒たちの思考を深めるために発言を促したり、気づいていない視点を提示したりするなど、発問の技術が高いからだ。また、板書にも工夫があり、すべての子どもの発言を拾っている（ICT 機器の活用のヒント：杉江）。

Q　ベテランの先生と若い先生をつなぐにはどうしたらよいか。

A　若い先生が「自分がやってみたい授業」を、「先生だったらどうやりますか」と聞いてみるとよい。若手の先生方の授業への自信が、生徒たちの目の輝きを変える。

●石井英真氏（京都大学大学院教育学研究科准教授）

専攻は教育学（教育方法学）。現代社会が求める学力や授業や学校のあり方について、歴史や諸外国の動向を学びながら研究している。主な著書に『今求められる学力と学びとは―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』（日本標準、2015 年）など。

公開シンポジウム「今めざすべき授業のあり方―『真正の学び』を実現する『教科する』授業へ―」

（参考にしたい論点）

１　「教科する」授業＝「真正の学習」というヴィジョン

①教科における実用や応用の重視とイコールではない。

②知が生み出される現場の人間臭い活動のリアルを経験する。

③知識・技能が実生活で生かされている場面や、その領域の専門家が知を探究する過程を追体験し、「教科の本質」をともに「深め合う」授業。

２　「教科する」授業にむけて授業を問い直す視点

①単元レベルでは「総合」課題を位置づけ「末広がり」の構造にすることで、授業レベルでは知識構築学習を目指すことで、問いと答えの間のより長い学習活動を保障していく。

②練り上げ型の一斉授業以上に、ペアやグループでの創発的なコミュニケーションを重視する（教師や正解を忖度する学びを超える）。

③子どもたちは授業においてどんな動詞を内的に経験しているか。

３　「深い学びを創るために」

①教材研究で教師自身がまず学ぶ（テクスト・資料・現実の問題といった対象世界と対話し「教科する」）、さらに、授業においては、学んだ結果を教えるのではなく、対象世界を学習者と共有しながら、学んだ結果を教えるのではなく、対象世界を学習者と共有しながら、先行研究者としてそれを学び直す。

②教科書でわかりやすく教える授業を超えて教科書をも資料の一つとしながら学ぶ構造を構築し、その上で教師が資料（集）の質と量を吟味することが求められる。

③思考の材料を子ども自身が資料やネットなどから引き出していくことを促すことで、思考の材料となる複数の豊かな資料を常に参照しながら対話し、タブレット等で対話の過程を振り返ったりする（ICT 機器の活用のヒント：杉江）。

（懇親会の席で受けたアドバイス）

Q　先生の、対話するのはまずは「教材」であるという考え方に共感する。大学の入試問題は、大学の先生の「ロマン」であり、それを汲み取り、向き合うことが大切だと授業で話している。そういう対話ができる力を育てるにはどうしたらよいか。

A　先生の言う通りだ。京大の入試もそういった気概で作成している。例えば、訪問した高校では、「岩波新書を読ませているか」と聞いている。知を構築した文章を読むことに慣れさせたい。

Q　難しい入試問題であればあるほど個人で向かい合わせないと力がつかないのではないかという思いをもっていらっしゃる先生がいるが、どうか。

A　授業の型ではなく、子どもにどうやって教材に向かわせるかが大切。ただ「難しいからみんなで」ということもある。ただし、難しいからこそ巧みな教師の主導が必要となってくる。

Q　活動させて終わりという授業にならないためにはどうしたらよいか。

A　教師は生徒を放っておくのではなく、活動中はきちんと観察する。そして必ず最後に、生徒たちを揺さぶる発問をする。「本当にそれでいいのか」など。

Q　どうしても大学入試の実績を上げる指導から逃れることができないのだが。

A　それは仕方がない。ただ、解き方のパターンをドリル的に覚えさせるような塾型の指導は避けてほしい。そのために京大でも中間層が伸びていかない。教材の向こうにある文化、人間臭さを感じさせる授業をしてやってほしい。

Q　SGH の評価はどういうところがポイントなのか。

A　やはり論文の完成度である。縦横無尽に話して聞いて、それらを書いて論理を詰めることで言葉の力を鍛えたり資料集などからの知識の吸い上げを促したりしてほしい。

Q　「総合的な探究の時間」の取り組みは現場でも、なかなか難しいのだが。専門高校は地域との連携で商品開発をしたりするなどの取り組みで時代の流れにフィットしている。普通科高校は本当に難しい。

A　いろいろ取り組んだあと、こんな質問を投げかけてやってほしい。「なせこの課題に取り組んでいるのか」「ところで、どれだけ地元に残ってくれるかな」と。生徒にとってやりがいがあるかが大事。「探究」は純粋学問的な高みを極めていく方向性のものもあるが、京都の堀川高校の「探究」は、あれは特活。がんがんやらせる。特活の指導ができる先生は「探究」の指導がうまい。

Q　分掌の希望を書いてもらうと、前任校では「進路」と書く先生が多かった。若い先生が「特活」を任されることが多いが、それが授業への自信となるかもしれない。

A　そう。「特活」の指導が上手な先生はアクティブ・ラーニング型の授業が上手。同じく文化系の部活動を上手に指導できる先生もアクティブ・ラーニング型の授業が上手。

Q　働き方改革の波が押し寄せてきて「合理的」や「時短」という言葉がやたら聞かれるようになった。それが安易に授業や対生徒相手の活動に結びついてしまっていることがある。先生がおっしゃるとおり、日本の伝統的な授業像を発展継承するくらい授業改善が進んだあと、働き方改革が来てほしかった。

A　昨今、一番先生方の時間をとらせているのが保護者対応だと思う。あの堀川高校でも苦情がくる。あの「探究」は特活だから、厳しいことを言うわけ。そうすると、保護者から「どうしてそんなひどいことを言うのですか」って（笑）。

（懇親会の席でその他の先生から受けたアドバイス）

Q　本校ではグループ・ワークもペア・ワークもさくさくやっている。でも、修学旅行中に、トランクが閉まらないという理由で 20 分も遅刻してきた生徒に対して、同じ班の生徒たちが様子を見に行くことも連絡することもしなかった。これが中堅校や教育困難校だったら、本能的な感情で「俺、見てこようか」（中堅校のレベル）、「俺、見てくる（制しても行ってしまう）」（教育困難校のレベル）となったであろう。あんなにグループ・ワークもペア・ワークのできるのに。

A　もしかしたら、グループ・ワークやペア・ワークが、教員に忖度したものになっているのかもしれませんね。

３. これまでに見えてきたもの

入学当初から高い学力と大学進学に向けた強い意欲、そして「従順さ」を兼ね備えた生徒たちが主役の進学校では、偏差値を上げて受験を突破させるための授業でも、その対極にある、進歩的な教員による自学自習型の授業や生徒同士の教え合いの授業でも、困難なく進められるだろう。2019 年度に岐阜県が力を入れた ICT 機器を活用した授業にしても例外ではない。上記の報告のなかでも指摘されている通り、生徒たちが教員に忖度しているからだ。

その一方で、多くの困難を抱える生徒たちに小さな成功体験を重ねさせ、背中を押してあげられるような授業がしたい、そのためには何をしたらよいのか、と喘いでいる教員たちの声は、なんと重いことか。しかし、たとえば先進的で高度な ICT 機器を活用した公開授業研究会などにおいては、そうした悩みは上がるだけで終わってしまう。

進学校でも、中堅校でも、教育困難校でも、柴田好章氏が提起していた、適切な発問・指示・説明を大切にしたい。あるいは石井英真氏が提唱する「真正の学び」を自校に落とし込んでみたい。そして、多くの研究会においては消えてしまいがちな教員たちの思いや願いを掬い上げ、支援と励ましに裏打ちされた授業づくりを発信していきたいと考えるようになった。

４. 現在の授業実践

筆者は現在、週 2 時間、1 年生の「国語総合」の現代文を担当している。8 月以降、現任校の黒板もホワイトボードとなり、実物投影機とプロジェクタが設置された。そこで、基本的には以下の形式で授業を展開している。

①生徒が理解できなかった点を、「前回の復習」というスライドで説明する。
②「本時の目標」のスライドを提示する。
③写真や動画を活用して説明する。
④ノートに貼れるサイズのワークシートを利用して、生徒が板書を写す手間を極力省く。
⑤本時の中心である、個人の活動やグループの活動をスライドで提示する。
⑥最後に必ず添削用の課題を取り組ませ、振り返りと一緒に提出させる。

このように ICT 機器を活用することで生まれた時間を活用して「主体的・対話的で深い学び」を実現していくために、すでに二つの単元で発展学習を実践した。

①『羅生門』はなぜ誕生したのか（グループ代表によるパネル・ディスカッション）
②「今私たちにできること」（広島市立基町高校創造表現コースが制作した「次世代と描く原爆の絵」35 枚を借りてのギャラリー・ウォーク）

いずれも校内における公開授業として実施した。2020 年 1 月には太宰治の『富嶽百景』を扱う授業で「月見草の秘密に迫る（仮題）」を実施する予定である。そのために 2019 年 10 月には太宰が暮らした三鷹市に 2 回訪れて取材し、12 月には富士宮で富士山と「へたばるほど」対話を行った。

最後に、もう一度強調したい。我々教員が、そして学校が、生徒たちの期待に応え、希望となるためには「授業、何よりも授業」である。